

水牛通信

人はたがやす

水牛はたがやす

稲は音もなく育つ

動物取り締め官 藤本和子 2

水牛通信一〇〇号記念コンサートのお知らせ 31

VOL.9 NO.1

毎月1回・10日発行

定価200円

動物取り 締まり官

藤本和子

キャロルのカーキ色の制服の上着のほうは、彼女の寸法をとって仕立てられたものであるのだから、からだにぴったり合っていない印象だった。肩がわずかに大きすぎるし、袖丈も長すぎて、手首がふかく隠れている。袖の先からでている彼女の手は、からだの大きさにやや不釣り合いに小さい。カーキの制服はズボンで、シャツも薄いカーキ色だった。それはシャンペン市の動物取り締まり官の制服だった。

キャロルは金髪で、それは染めたように黄色っぽい金色なのだが、染めているわけではないのかもしれない。化粧のファンデーションの色が彼女自身の膚よりずっとピンクがかっているの、薄い桃色の面をつけているみたいでもある。背丈はきつと百六十五センチほどだろう。体重は五十五キロくらいだと思う。痩せてもいないし、ふとってもない。そして彼女はまた二十代のわかい女性だ。結婚しているが、子供はいない。

キャロルに会ったきつかけは栗鼠だった。まだ地面にじめついた雪がのこっていた、一昨年冬の冬のことだった。ガレージに入るたびに、壁の中でこそごそという音がした。ち

いさなげものの音だと、すぐにわかるような音だった。しばらくすると、ガレージの戸の、地面についている下の部分に半円形の穴があきはじめた。歯形があった。黒のペンをぬった戸のそこだけ、なまなましく白い木の地肌が見えた。そして、間もなく、その穴をくぐって出たり入ったりしている栗鼠の姿も目撃されるようになった。壁のなかから、かりかりと何かを齧っている音もきこえてきたし、ガレージには栗鼠の尿のにおいがみちみちた。

破壊的な栗鼠を退治するといっても、毒薬を使ったりしたら、ちいさい子供たちは衝撃をうけるだろうし、わたしたちもいやな気分になるだろう。荒物屋で鼠でもさがそうか、という話になって、でかけてたずねると、栗鼠をとる鼠は市販されていない、という答えだった。赤いジャケツトの店員はいった。

「市の動物取り締まり課に連絡したら、鼠をかけてくれるんじゃないかな。それなら無料だしね。税金払ってるんだから、利用したらいいんだよ」

動物取り締まり課には、警察の緊急番号をつかって連絡する。日本でいえば、ヒヤクトウバンだ。動物取り締まり

課、といったところで、課員はキャロルひとりきりなのだ。つまり、キャロルが「課」そのものなのである。そしてその彼女はワゴン車でたえず町のなかをパトロールしている。つまり動物取り締まり課はたえず移動中であるわけだから、その「課」と連絡をとりたい場合は、ヒヤクトウバンに電話して、警察のパトロール車の配車係に、「課」すなわちキャロル・スミスに無線連絡をしてもらうことになる。

だから、わたしもヒヤクトウバンして、無線連絡をうけた動物取り締まり官がこちらに電話してくれるのを待った。玄関の呼鈴をおした「課」に、わたしはうったえた。

「ガレージの壁のなかに栗鼠が巣をつくってしまっただよなのですよ。ガレージのなかはひどく臭いし、壁の内側を齧っている音さえして、退治しないとイケないと思うのだけれど。栗鼠は動物取り締まり課の管轄ですか」

「退治してほしいといわれれば、鼠をお貸しするんですよ。市が一日二十五セントで、鼠を貸すのです。ちゃんとわたしがかけてあげます。餌はパンにピーナツバターをぬったものなのですが、パンとピーナツバターはありますか」

「あります。鼠を借りることにしたいです。なぜ、ピーナツバターのですか」

「栗鼠はナッツが好きなのでから」

「うっかりしました。そりゃあ、そうですわね。ところで、鼠にかかった栗鼠はどうするのですか。殺してしまうのですか」

「わたしのトラックにのせて、町の外まで連れていきます。森のあるところまで連れて行って、放してやります」

「栗鼠のほかに、どういう動物を捕まえるの、あなたは？」

「あらいぐまはしょっちゅうよ、野犬もね」

「あらいぐま！ どうやって、捕まえるの？」

「鼠を使うこともあるけれど、あらいぐまは賢いので、なかなか鼠にはかからないの。住宅の屋根裏部屋に住みついてしまったような場合は、あたしが屋根裏へのぼって行って、追いまわして、手で捕まえるの。この界限はね、オポッサムが多い。オポッサムは追いつめられると、歯をむきだして、歯のあいだからシューシューと音をだすのよ」

自分の住んでいるあたりに、オポッサムがいるなど、ち

つとも知らなかった。

わたしはパンにピーナツバターを塗って、キャロルにわたした。彼女がそれを横長の金属製の鼠のなかにしかけて帰っていくと、夜のあいだに栗鼠が一匹かかった。餌のピーナツバターは凍っていた。ピーナツバターは凍ると匂いがしなくなる、とキャロルはいつていたから、栗鼠はピーナツバターが凍る以前にかかったのだろう。わたしはキャロルにいわれていたとおり、栗鼠のかかった鼠に古い毛布を折ってかけた。鼠を暗くしてやらないと、栗鼠は逃げたがって、鼠のなかで闇雲にあればまわる、そして金網に体をぶつけて傷つく、暗くしてやると、静かにじっとしているものだから、と彼女はいつていたのだったから。警察に電話すると、栗鼠を引き取るために、ふたたびキャロルがやってきた。

彼女は生け捕りの栗鼠のはいった鼠をワゴン車に乗せた。わたしは鼠の賃賃料金の二十五セントをはらいながら、キャロルにたずねた。

「きょうの獲物はなに？」

「犬が二頭と、野良猫一匹とアライグマが二匹。見たい

？」

「見たい」

トラックは有蓋で、トラックというよりワゴン車だが、キャロルはトラックと呼んでいた。なかには、大小いくつもの檻がおかれている。犬と猫とアライグマが、それぞれの檻のなかにいた。犬たちは首輪も鑑札もつけているのだから、野犬ではなく、放し飼いにされていたところを捕まってしまった連中なのだろう。猫は山猫のような大きな、つやのないぼうぼうで、背中には円形の禿げがある。あきらかに野良猫だ。それもきわめて野良歴のながそうなやつ。アライグマは檻のずっと奥に、体を檻におしつけるような恰好でじっとうずくまり、黒ビードマの目で、こちらをみつめている。

「ずいぶん大きなアライグマねえ」

「大きくはないわよ、まだほんの子供よ」

さきほどキャロルが、アライグマ二匹、といったのを忘れていた。大きなアライグマだとわたしは思ったのは、子供のアライグマが二匹、おびえて、折り重なりからみあって、一匹の大きなアライグマのように見えたのだった。眼

鏡をかけたみたいなのが警戒心をむきだしにしている。

わたしのちいさな娘が保育園にいて、まだ帰宅していないことは残念だった。五歳の娘は動物にたいするおそれの感情のまったくない子で、猛々しいドーベルマン・ピンシェルに向かつてさえ、一目散に駆けよる。この犬は子供が好きですかと、犬を連れてくる人にたずねるんだよ、犬を連れてくる人が、子供は好きだ、といってから、撫でてやるんだよ。子供のことは嫌いな犬もいて、そういう犬のことを、突然撫ぜたりすると、噛まれることだってあるんだからねと、わたしはしつこくいい聞かせているが、いっこうに効目はない。彼女はこれまで犬に噛まれたこともなく、おそろしいと思う理由もないので、犬の姿をみかけたら、遠くからでも一目散に駆けていく。

「わたしの娘がこのアライグマたちをみたら、きっととても喜んだと思うの。彼女は動物園の飼育係になりたいといっているから」

「大賛成。それなら、わたしの後継者として、動物取り締まり官になることだってありうるわね」

成人した娘がこの町に住むことになるだろうとは、わたし

しにはとても思えないが、それをわざわざキャロルということもないから、わたしはいわない。

「将来の希望はくるくと変わるひとだから。去年は医者になりたいといっていたけど、今年はおかあさんになるとか、カウガールになるとか、ついに消防士になると決意した、とかいってるわ」

「いずれにしろ、ちいさな子供が動物にたいして愛情を示すことは、よろこばしいことよ」

「あなたも子供のころ、動物が好きだったの？」

「好きだった、とても。高校のときにね、半分働いて、半分学習するというプログラムにはいってね、一年間、靴屋で働いたことがあったの。靴屋の店員になって、靴を売ったの。つまらなくて、つまらなくて。店員とか、そういう仕事はわたしには全然むいていないとわかったから、高校を卒業してからは、動物愛護協会に就職したの。そして、それいらいずっと動物——」

「動物取り締まり官になってから、何年になるの？」

「七年よ。その前の一年半は、動物愛護協会のなかで働いていたの」

それなら、キャロルは二十六歳ぐらいだ。

「大蛇をつかまえたこともあるのよ。長さ三メートルもあった」

「危険な仕事ねえ」

「動物は危険じゃないのよ。危険なのはニンゲンよ」
キャロルのワゴン車に一日同乗させてもらえないかとたずねると、彼女はかまわないけれど、警察の許可がいるといった。わたしの栗鼠を連れて帰った彼女から電話があった。警察はわたしの同乗を許可するといっているといった。そこで日取りをきめて、わたしがその日の朝に警察へ行って、彼女とおちあうことになった。

シャンペン市の動物取り締まりは、他の市とおなじように、警察の管轄だ。しかし、その業務は普通の警官が担当しているのではなくて、動物愛護協会の職員が警察へ出向くかたちで担当している。給料は市警がはらう。キャロルは朝の六時から出勤する日もある。週に一度だけ、動物愛護協会の職員である若い男性が彼女と交替するが、あとは

全部キャロルの責任だ。

約束の朝、警察署の受付の窓へいくと、係の女性がいった。

「ああ、ドッグ・キャッチャーと待ち合わせているのは、あんたね」

彼女はわたしが口をひらいて用件をつける暇もなく、そういったのだった。ドッグ・キャッチャーという古めかしい言葉をつかって——。わたしは子供のころ、イヌゴロシという言葉を目にしたことがあった。ドッグ・キャッチャーという用語はそのイヌゴロシにあたるといっているのだらう。キャロルの任務は野犬を捕獲することだけではないのに、警察の窓口自身がイヌゴロシにあたるような言葉をつかうのは、まずいのではないか。

すぐにキャロルがあらわれて、でかける前に、わたしは書類に署名する必要があるといった。

「これを読んで、条件を承諾できると思ったら署名してね。それからでかましよう」

その書類というのは、勤務中の警察官の運転する車両に同乗して、警察業務の遂行を観察することは、負傷もしくは

は死亡する危険をおかすことであることをわたしは完全に承知しておりますという供述書だった。わたしは負傷も死亡もいやだったが、早起きしていったことが無駄になるのは、もっといやだったから、署名した。

「何か事故があっても、警察を訴えることはできない、という意味よ」

狂犬に噛まれるだろうか？ 野犬追跡の大疾走において、ワゴン車が電柱に激突して大破するだろうか？ ふと思いついてやることで、死亡したらたまらないな、と思いがながらも、わたしはワゴン車にむかうキャロルの後をついていく。

ワゴン車は、なるほど彼女がいうとおり、恰好はワゴン車だが、トラックだ。高い助手席にすわると、罐いりのコカコーラが目にはいった。ダッシュボードにボンドではりつけたコースターにのせてある。わたしがそのコカコーラを見ていることに気がつくとき、キャロルはいった。

「朝、一罐買ってね、一日かかってちびちび呑むのよ」

「ぬるくなってしまうでしょう？」

「そうね。では、でかけましょう。野犬が二頭うるついで

ている、という通報があったから」

ダウンタウンにある警察署の駐車場をでて、わたしたちは町の北東部の住宅地に向かっていた。朝の陽光があかるい。勤めにでかける人々の車がまだ行き交っている時間。

人口六万のこの町では、ラッシュアワーとよばれる時間も、車の渋滞などほとんどない。ちょっと道路が混むとラッシュだ、ラッシュだとラジオが騒いだりする。

「あなたは高校のときには、半分働いて、半分勉強するというプログラムにはいったといったけど、どういう生徒たちがそういう方法を選ぶの？」

「勉強ばかりしているのは嫌だ、という生徒たち。そういう生徒には、何らかの技術をならわせたほうがいいだろう、という考えからよ。美容師の養成所へいくようなことが多いの。あたしの場合は靴屋で働いてみなさい、ということになった。

あたしは男ふたり、女ふたりの四人きょうだいの家庭にそだったの。あたしは三番め。両親は「ジム・ジョーンズ」という倉庫会社で働いている。祖父は航空機の製造工場の工員をやっていたの。母方の祖父は酪農場をやっていたの

だけれど、それもこの近くにあったのよ。ヨーロッパからやってきた先祖のことは、あまりわからないのだけれど、母方のほうはドイツからきた人たちらしいのね。ドイツから追い出された、というんだけど、どういう事情で追い出されたのか、あたしは知らないの」

七、八分も走ると、野犬がいる、と通報された地域にもう接近していた。

「今朝、まず捕まえる犬は、どういう犬なんですか？」

「ドーバーマンと雑犬だという話よ」

「ひゃあ、こわい。こわくないの、ドーバーマンでも？」

「こわくない。ドーバーマンはちっとも悪い犬じゃない。こわいと感じる人はね、体からあるにおいを発散させるのよ。犬はそれを嗅ぎつけて、あっ、こいつ、こわがっているな、と感づくの」

角をまがると、どうだ、ちゃんと褐色の大きな犬が二頭みえた。せかせかと歩道を走っている。明確な目的をもって、そうしているような印象をあたえる走りかた。トラックを徐行させて近づくと、犬たちはきつと芝生ににげた。トラックをとめて、わたしたちは降りた。すると、犬たち

はこちらに駆けよってきたが、途中でとまった。キャロルがその犬たちにちかよる。

「おはよう、犬たち。ご機嫌いかが？ 逃げないでもいいんだよ。ほうら、こっちへおいで。あれ、首輪もしてるんだね、こっちのあんたは。で、あんたのほうは？ 首輪、ないんだねえ。どれ、どれ、車に乗ってみようか？ ねえ、いこうよ」

犬たちにむかって、口をひらいたキャロルは、赤ん坊をあやすような口調になる。声音もかわる。犬たちはさかんに尾をふっていたが、首に縄をかけられたとたん、はげしく頭を左右に動かした。一頭は縄の結び目がほどけてしまふほど、はげしく抵抗した。もう一頭は車に乗りこんでから暴れはじめて、するりと首を縄からぬいた。はじめからやりなおした。犬たちは逃げるだろうと、わたしは予想したが、逃げごしになっているのに、逃げない。キャロルが「よし、よし、さあ、でかけよう」というと、じっと耳をかたむけるようなふうをして、それから擦りよってきた。

そして、キャロルがふたたび縄をかけようとすると、今度はたいした困難もなくはこんだのだ。車には引きずりあげ

るようにして乗せたが、猛然と抵抗することはもうなくて、犬たちはそれぞれの檻におさまった。

運転席にもどったキャロルの息があらう。煙草をたくさん吸うから、ちょっと動いただけで、そうなるのではないだろうか。右手の薬指から血がながれている。

「血がでてるわよ」

「犬があらがったとき、車のドアで擦りむいてしまった」

「手当てをしたら？」

「だいじょうぶ。だいじょうぶ」

「せめて、ちりがみでふいたら？」

「そうね。ああ、ありがとう」

「手袋しないの？」

「しない」

「犬に噛まれたことある？」

「二度。最初のときは、とてもやさしい犬でね。尾をふって、さかんにあまえて。でも、おかしな犬で、尾をふってあまえながら、噛みついたの。二度めは、ブルドーザーに轢かれた犬を助けようとしていたときだった。担架がなかったので、響をはめようとしたら、噛みついたの。その

まま抱いて、トラックまで運んでね。あたしはセントバーナードでも、グレートデンでも捕まえるけれど、危険な場合は、ほら、この長い棒をつかって、犬とあたしの距離をたもつようにしてやるの」

そういって、彼女はトラックのなかの金属の長い棒をしまった。

「狂犬病の予防注射はしてある？」

「三度した」

「おなかにぶすりやられたの？」

「予防注射の場合は腕にするのよ。狂犬病にかかっている犬に噛まれたときの手当てよ、腹にぶすりやるのは」

「動物取り締まり官になるための訓練は、どこでうけたの？」

「アラバマ大学にね、「動物取り締まりアカデミー」というのがあるの。全米動物愛護協会とアラバマ州警察が共同で運営している。そこへいったのよ」

「二年ぐらい？」

「三週間よ。そこへいくと、動物の病気の見分けかとか、犬の行動を観察して、その犬の言語を読みとる方法と

か、いろいろ教えてくれる。でも、実際にどうやって動物を捕まえるかについては、教えてはくれない。これは自分で考えて工夫して、経験をつむことで学ぶしかないのよ。

動物取り締まり官になってから、あたしは狼の行動形態について勉強してみたの。それを通して、犬の行動形態がわかるのだから。狼について学ぶと、恐怖にかられて噛みつくタイプの犬とか、社会化されていない、攻撃的な犬の扱いかたがわかってくる。動物取り締まり官の仕事は、ひとから教えてもらうだけじゃできない。自分でいろいろ工夫してみないと、つとまらない」

つけっぱなしになっている無線ラジオから、警官どうしの会話が聞こえてくる。

警官1の声 「で、問題の建物のなかでは現在、マリワ

ナを吸っている者たちもいるようだがね……」

警官2の声 「逮捕すべきかな？」

警官1の声 「まあ、いいんじゃないかな」

ガ―。そこで無線は切れた。

「給料は？ そんなこと、訊ねたらいや？」とわたしはたずねた。

「いやじゃない。よその町では、時間給十ドルとか、二十ドルとかいう話をきいてるけど、わたしは五ドル」

「ずいぶん少ないのね、たいへんな仕事なのに」

「そう。給料のことだけじゃない、問題なのは、動物取り締まり官の仕事は、ひどく誤解されている。動物愛護協会は資金がたりなくなると犬を捕まえるんだ、なんていうことを言い触らす人たちがいるのね。そんな誤解が生じるのは、もし野犬狩りをしなかったら、どんなことになるか、たいがいの人には想像もできないからよ。もし野犬をほっておいたら、彼らはやがて群れをなして行動するようになるの。町じゅうを大集団となって駆けめぐり、ごみの籠をひっくりかえしたり、人間を襲ったりするようになる。危険きわまりないし、街路は不潔になる。

あたしのこと、「ヒトラの娘！」といって罵る連中もいるのよ。「犬狩りして、殺して、きさまはうれいのか？」なんて、いちばんつらいのは、子供たちに「イヌゴロシ！」なんて怒鳴られるとき。「あんた、ほんとにその手で犬を殺すのか」なんていうのよね。

あたしは動物が好きだから、この仕事をしている。緊張

の多い仕事よ。誤解がいちばんつらい。苦しい気持ちになる。親友みたいな連中だって、よくもまあ、あんた、そんな仕事をやるわね、あんた、動物好きなんだとばかり思ってたわ、なんていうの。

さびしい。なんでこんな仕事続けているんだろう、と自分でもわからなくなることある。ペットを放し飼いにしている飼い主に、大声でわめきたてられ、罵られる……あるとき、大きなレンチをふりかざして、追いかけてきた男もいた。危険よ、ニンゲンで。うんざりしてしまふ。

でもね、すっかり情気しているところへ、立派な仕事をしている、と投書してくれたりする人もいるのね。車から降りたあたしのところへ、わざわざ寄ってきて、自分の飼っている犬がどんなにすばらしいか、そんな話をしてくれる人だっている」

「凶暴なニンゲンには、どうやって対抗するの？」

「パトロール警官の応援をたのむのよ」

「サイレンならして、いっせいに、何台ものパトカーが応援にくるのね！」

無線ラジオがキャロルのトラックを呼んでいる。騒々し

く吠えだてる犬について、警察に苦情がはいっている、ということだった。現在走行中の地域から二キロほどの、中流の住宅地からの通報だ。

いま走っている場所は、公式にそう呼ばれているわけではないが、いわばゲットーのような区域だ。草ぼうぼうの庭や、壊れた階段や、崩れおちそうなポーチがある。窓に板を打ちつけた廢屋。黒ずんだ緑いろのペンキが剥げおちて、無惨な皮膚病に苦しんでいるような二階建ての家。

青色の荒涼とした、大きな建物を、出たり入ったりしている人々の姿がみえた。

「あれ、なに？」

「ブルー・アイランド。パーよ。ブルー・アイランド……先週ね、ピストルの撃ちあひがあった。新聞にも出ていた。知らない？」

昼間から酒をのまずにいられない人々のブルー・アイランド。青い島。そのまわりには建物はなくて、ブルー・アイランドはむきだしだ。陽光のなか、ささくれだった夢の島。

わたしたちはそこから中流住宅地のほうへ向かっていた。

さっき収容した犬たちが、トラックの後部の檻のなかで、まるで人間のそれに聞こえるような深い溜息をつく。そして、放屁する。わたしたちは窓をあけるが、においのもの凄さに気がとくなりそう。

「ごみ箱をあさって、腐ったものでも食べたのね」とキャロルがいう。

また溜息をついている。

「この二頭はずいぶんおとなしいわ。何時間もがんがんと吠えつつける犬もいるし、車に酔って、吐く犬もいるのよ」

たしかに人間まがいの溜息のほかには啼声もあげずおとなしいが、放出しているガスのおいは控え目ではない。

だからだと冬がつづいていた。街路の並木は芽をふく気配さえみせず、さかさ吊りの巨大な箒の列のようだ。スプリングフィールドという大通りをしばらく西へ走って、それから南へ折れた。そこはホリデイトウンという名の分譲住宅地だ。その住宅はみすばらしくもないし、うつくしくもない。完全に中間的なたまたまの一面。やかましい犬がいて、近所迷惑だ、と通報された家の前にトラックを

とめた。そこへちやうど玄關の扉をあけて、白人の中肉中の若い女性が出てきた。彼女はドライブウェイにとめてあった二台の乗用車のうちの、道路に近いほうのトランクをあけて、紙包みをしまった。キャロルが近づいていった。「失礼ですが」と彼女はいった。彼女が口にしたのは、その言葉だけだった。

「あんた、どこかよその犬とまちがえてるのよ！」

キャロルはだまっている。

「誰だかしらないけど、この家の犬のことで、警察にしっかりと苦情をいっている人がいるらしいけどね、この家の犬は吠えもしないし、外に出ることもないんですからね」

「そうですか」とキャロルはとても静かな声でいう。

「ちよっと、お話をうかがいたいたいですけれど」

「あたしはここに住んでるわけじゃないの。親類の者にすぎないのよ。あたしに話したって無駄よ。だいいち、あたしはでかけるところですからね」

「そうですか。この家の人たちの苗字は何というのですか？ 犬はどういう種類の犬ですか？」

「そんなこと、あなたにおしえてあげる必要もないと思

うのよ。この犬はおとなしいんだから」

「それでは、騒々しく吠えたりする犬の扱いについて書いてあるパンフレットだけ、郵便受けにに入れていきますから」

「勝手にいれてきなさいよ」

赤い車のドアをばたんと閉めて、乱暴にバックして、親類の者だという女は走り去った。

「キャロル、苗字は郵便受けに書いてあるわ」

「あたしも気がついていたら」

キャロルは玄関の脇の郵便受けにパンフレットを入れた。

「玄関に足音がしたら、犬は吠えるものなのに、吠え声は聞こえない。へんね」とキャロルは不審そうだった。わたしたちはトラックにもどった。

「あのひと、失礼だったでしょう？」

「ああいうこと、しょっちゅうなの？」

「しょっちゅうよ。『おれの地所をどけ！』とかね。いつか、体重が十キロもあるような猫が、子供たちをひっかいて怪我させている、いろいろ悪さもして困っているという苦情があったから、その猫を收容しにでかけたの。そしてたら飼い主がでてきて、『おまえは猫族の敵だ』といって

ね、告訴したのよ。

いつだって、おかしいのは人間たち。狂犬病に感染してしまっているんじゃないかと疑いたくなるような連中も多い。

居留守をつかう、というのは常套手段。何度もたずねていって、そういう手をつかう家だとわかっている場合は、トラックをずっと離れた場所にとめておくの。制服姿だと、家のなかからわかってしまうから、扉を開けないだろうと見当のつくようなときは、わざわざ平服に着替えていくことだってあるの」

「扉を開けさせるところまでは成功しても、該当するよな動物はいないね、といわれたらどうするの？ 押し入って、しらべるの？」

「捜査令状がないかぎり、それはできない」

無線ラジオがピーピーと音をたてる。そしてキャロルの番号をいった。

「D七十四。はい、はい」

「シュルトン・トレーラーハウス用地の住宅七百四十一号のミセス・タックソンが、猫捕りの罠をしかけてほしい

と書いてますよ。オーバー」

「はい、了解。D七十四。オーバー」

「オーケー。オーバー・アンド・アウト」

「猫の罠をしかけてくれて？」

「そう。このタックソンというおばあさんはね、毎年きまってこの時期になると、野良猫を捕まえてこい、と連絡してくるの。彼女は自分でも二十匹ぐらいの猫をトレーラーのなかで飼っているのね。そして、トレーラーの外にも、無数の野良猫がうろついているの。野良猫たちは完全に野性化していて、二度とふたたび馴らすことは不可能な連中だけど、おばあさんが餌を外においておくので、トレーラーに寄ってくる。そのくせ、野良猫がうるさくてしょうがないという。罠をかけてくれというから、罠をもって行って仕掛けてくる、すると、腹をたてて、仕掛けておいた罠を、道路のまんなか放りだしたりするのよ。

今月になってから、あたしはもう十四匹も捕まえたのだけれど、まだ三匹のこっているの。

おばあさんはひとり暮らしで寂しいのだと思う。だから、猫をたくさん飼っている。でも、彼女の猫たちは近親交配で

繁殖してきたものだから、いろんな異常があるの」

わたしたちは町の北にあるトレーラーパークに向かった。そのトレーラー用地には、およそ二百戸のトレーラーハウスがある。なかには正面にアルミ製の円柱を立てたポーチまでつけた大きなものもあるが、おおかたは小さな家。列車の客車よりも細い家たちだ。これらの移動住宅を、人々はトレーラー用地に指定されている場所において暮らす。トレーラーパークとよばれていて、電気や水道がひかれていいる。都市ガスはなくて、プロパンをつかう。

トレーラーに住むのは、移動しやすいからではない。トレーラーハウスが住宅としてはもっとも安いから、それしか買えない場合にそうするのだ。住んでいる者たちの暮らしの感情をあらわすように、ペンキもはげ、荒涼としたたずまいのトレーラーもあるし、せいっぱいの工夫をこらして、扉のまえにポーチをつくったり、植木を植えてみたりしている家もある。そういうトレーラーは、ペンキもきれいに塗ってある。

トレーラーパークにはいってから、くねくねとトラックを走らせて、目ざす家に到着した。

トラックのエンジンの音を聞きつけたのだろう。年若い女性が扉を半開にして、首をつきだした。

「きたね」

「ええ。また罾をしかけてほしいんですね」

「そう。またぞろ、野良どもがうるさくてね。さかりがついてるね。夜もろくろく眠れないよ」

老女の髪は暑い日の畑のとうもろこしの毛のように、輝きを失い、ぐったりとなって、頭にへばりついている。色のあせたプリントの、化粧着のようなものを着て、素足にスリッパをはいているのだが、スリッパの爪先はおおきく破れている。関節炎なのだろうか、破れ目からつきでた爪先は瘤だらけの木の根っこのようだ。親指が第二指をおさえこむような恰好で、二本の足指がかさなりあっている。老女が口をひらくと、歯が上に三本、下に二本だけ生えのこっているのが見えた。

「罾はどこにしかけるんかね、きょうは？」

「家の裏がいいでしょう」

キャロルはトラックから罾をふたつおろしてきた。わたしの家のガレージのなかに仕掛けたのおなじ種類のもの

だった。餌につかうために、キャットフードを二罐だした。罐切りをまわしながら、キャロルがいった。

「無印のキャットフードは全蒸だめなのよ。一匹も捕まらないの」

彼女は餌をしかけて、猫捕りの罾を家の裏手にそっと置いた。

「ほかのところに猫の餌をだしてやっちゃだめですからね」

「なぜだい」

「だって、あなたにもらう餌で満腹してしまって、こっちは食べようとしくなりますよ。そうしたら、捕まえられないですからね」

「ふうん」

「かかったら、電話くださいね」

「わかってるよ」

わたしたちはトラックののって、猫のおばあさんに手をふる。扉の前の段々のうえで、彼女も手をふっている。

「彼女、きょうは機嫌がいい」とキャロルはいった。

「あれで？　ところで、昼食はどうするの？」

うか。クランシー。

「D七十四号車。動物愛護協会へむかいます」

「はい、了解」

協会はシャンペンの町のなかではなくて、市道を南へ十分ほどいったボンズヴェイルという村にある。シャンペン郡のちいさな農村のひとつだ。

シェルターの裏口から入って、キャロルは二頭の犬を檻にいった。

大きさまぎまの犬が一頭ずつ檻にはいっていて、檻のまえには、犬の種類、名前（わかっている場合）、年齢などが記入された札がさがっている。飼い主がわかっているのに、あたらしい飼い主を求めている場合は、その理由も記されている。

「あたしは食べたくないから、あなたのしたいようにしましょう。あたしはコココーラなんかを呑むだけなの。どこでもいいの。でも、昼休みする前に、犬たちを動物愛護協会につれていって、車からおろさなければならぬ。シェルターにいれるのよ」

「シェルターにいれられた動物はどうなるの？」

「七日間は協会においておくの。鑑札をつけている場合は、飼い主に連絡する。そして飼い主が引き取りにきたら返す。でもね、連絡しても、もういらぬんだ、という人たちは多いのよ。ぬいぐるみの動物でも買うようにして犬や猫を買って、あきたらポイと棄ててしまう。引き取るつもりはない、といわれた犬や猫たちと、野良の犬や猫は、健康であれば、あたらしい飼い主に引き取られるのを待つ」

「七日間？」

「そう。七日がすぎたら……殺さなければならぬの。いまトラックに積まれているドーバーマンたちはどうなるのか。一頭は鑑札をつけていて、クランシーという名が刻まれている。犬の名だろうか、それとも飼い主の名だろ

理由・引越しときまった。

理由・予想より、犬が大きく育ちすぎた。

理由・赤ん坊がうまれた。
理由・もう餌を買ってやる金がない。

猫たちの檻のならぶ部屋も三つあった。

医師や化学実験室で実験をしている人たちが着るような白衣をつけた女性がふたり、犬と猫の体重をはかって、食べた餌の量も記録している。

「日に二度、体温をはかるのよ。寄生虫がいる場合は駆除するし、予防注射も全部して、引き取りたいという人たちがすぐに連れていけるようにしてあるの」とキャロルがいった。

「病気がひどいような場合はどうするの？」

「眠らせてしまおう……」

わたしたちはトラックにもどった。

「D七十四号車、昼休みです」

「はい、了解」

わたしたちは町へもどって、グリーン・ストリートの、「ホワイトホース」へいった。大学の学生たちがやってい

るレストランだが、がらんとしている。一時半だった。まがいもののプラスチックの薪がくべてある暖炉があった。薪のなかには電球がはいついて、夜になったら、その電球をとます。すると、薪が中から照らされて、燃えているように見える。今はまだ暗いその暖炉の前のテーブルに腰をおろして、キャロルがいった。

「ああ、きょうはほんとに暇なこと。せっかく一緒にきてくれたのだから、何かエキゾチックな動物がつかまればいいのにな。」

もう二年も前のことになるけど、庭にコヨーテがいる！捕まえてくれ！という連絡がはいつたの。まさか、とわたしは思った。きっと、野犬をコヨーテと見まちがえているんだろうとたかをくくって行ってみたら、ほんとの話だったのよ。コヨーテがいたの。いったどこからきたのか、わからない。わたしはそいつを追いまわしてね。そして、ホイと垣根をとびこえて、道路へ出てしまった。それをトラックで追って、町の外へ追いだしたわけ。

町のなかを、鹿がうろついたりすることもあるのよ。毎年この時季になると、アラートン森林公園からやってく

るらしいの。五、六頭で群れをなして。庭に鹿がいます！という連絡がときどきはいるのよ。鹿はね、追いまわさない。ほうっておけば、やってきた道をたどって帰っていくもの。

二年ほど前になるかしら。大蛇がいる、どうにかしろ、という連絡があった。いわれた場所へ行ってトラックをためて降りていくと、待っていた人たちというのは、ランニングシャツだけしか着ていない、半裸の大男たちだった。彼らはあたしを見ると、なんだ、女か、女に蛇を捕まえることができるかなんて、わめいてね。

蛇はどこですか、とあたしはたずねた。男たちは一本の胡桃の木を指さした。なるほど、胡桃の大枝によく肥えた青い大蛇がまきついていたの。四メートルくらいあってね。

あたしはその胡桃の木にのぼって、大蛇を木からはがすようにして抱きとって、そのまま降ろした。図体が大きいけど、毒はないもの。男たちは、ヒャーとか声をあげて、いっせいに駆けて逃げたの。あたしが蛇をトラックに積みこんでいると、すぐ近くに一台の車がとまってね。男のふたりづれがおりてきて、そいつはおれたちの蛇だ、おれた

ちのペットの蛇だっていうのね。今朝、家から逃げだしたんで、ずっと探してたんだ、見つかってよかった、といっ

てね。毒蛇を捕まえたこともあるのよ。外から屋根裏へはいってしまつた蛇だった。あたしがそれを捕まえて、屋根裏からおりてくると、その家の主人が斧を手にして、近づいてくるじゃないの。『斧なんかもって、どうしたんですか』とあたしがたずねると、『毒蛇じゃないか、ぶっころしてくるよ！』というのよ。『よしてください。べつに誰かを噛んだというわけでもないんですから。わたしがトラックにのせて、町の外へつれだして、林のなかにでも放してやりますから』とあたしがいうと、彼はその憎しみにみちた表情をかえることはなく、『なぜ、そんなばかなことをするんだ。せつたいにぶつたぎってやる』といったのよ。人間てほんとにおそろしい。

人間てほんとにおそろしい。あたしはずいぶんいろいろの動物虐待の例を見てきたわ。

動物を虐待しているらしい、という通報があったら、あたしがまず行ってみることになっている。あたしは、家の

なかにはいって虐待の事実があるかどうか調べたいというの。おおかた、とんでもない、虐待してる事実などあるものか、さっさと帰れというわね。そうしたら、郡庁の動物虐待取り締まり官に連絡して、捜査令状をとりつけて、それから出なおして家宅捜査をするの。

ついこのあいだ捜査したケースはね、犬の首輪が首の肉にくいこんでいた事件だった。犬は鎖の首輪をさせられていたのだけれど、子犬のときにはめられたまま、成長につれて首輪がちいさくなったのを、そのままほっておかれたの。鎖が深く肉にくいこんで、肉にはりついてしまったのよ。手術して鎖をとったの。肉から切りとったの。

去年のちょうど今ごろだった。一軒の家から、合計四十一匹の猫を収容する事件があったのは。おばあさんが独りで住んでいる家だった。隣家の住人から、おばあさんの家が、なんともひどい悪臭がする、調べてもらえないかという要請があったね。

行ってみたら、家のなかには猫だらけ。ここにも猫、あそこにも猫、猫ばかり四十一匹。そして床には十センチぐらい糞便がつもっている。おばあさんのベッドにも、糞便が

ていた。しばらくしてから立ちあがって、台所の電話から誰かに電話をしていた。『たすけておくれよ。誰だかわからないんだけど、トラックでやってきて、あたしの猫を一匹のこらず連れていくっていうんだよお。あたしは猫たちにひどい仕打ちなどしてないのに、なんで、こんなむごいことするんだろうねえ』そういって、泣いていたの。

あとでわかったのだけれど、電話の相手はおばあさんの息子だった。この町に住んでるのに、結局その日、おばあさんを訪ねてきた者はいなかったのよ」

「ひどい臭いだったでしょうね」

「ひどかった」

「気分が悪くなることはなかった？」

「途中、一度だけ、肺がおかしくなってしまうて、息がつまりそうになったの。これはいけないと思って、外へでて、しばらく休んだ。でも、またもどって行った。あとで調査に行った人たちはガスマスクをつけて入ったのよ。

あたしにとってもっとも辛かったのは、おばあさんの猫たちを奪っていかなければならないことだった。あたしには動物をあつかう権限しかない……猫たちを収容すること

つもっている。それはマットレスむきだしのベッドでね。

猫たちはみんな、それはひどいようすだった。頭にわずかに毛のこっているだけで、あとはすっかり毛の抜けおちている猫……冷蔵庫の裏に、やせこけた猫の死骸があって、そのまわり、そのうえを、ごきぶりがうじゃうじゃと這いまわっていた。かろうじて生きている猫たちも、のこらず骨と皮ばかり。台所には牛乳とクラッカーしか見あたらないようだった。おばあさんも猫たちも、それしか食べていないようだった。

家の床には猫の糞便がうずたかくつもっていただけでなく、床という床、すべてごみとがらくたで覆われていて、まったく文字どおり足の踏み場もなかったの。衣類、古箱、古靴、ごみ、ごみ、ごみ……。

猫たち四十一匹、収容してね。のこらずひどい状態で、健康なのは一匹もいなかった。全部安楽死させるよりほかなかった。

あたしが四十一匹の猫をつぎつぎにトラックに運びいれているあいだ、おばあさんは外へ出てね、玄関の階段に腰をおろして、肩をおとし背中をまるめて、じっとつつむい

しかできない。四十一匹の猫を収容して、あたしはそのおばあさんをたった独りきり、その家に置きざりにして帰ってしまうしか、できなかった。かわいそうで、かわいそうで。

その夜、仕事をおえてシャワーをあびた。一度あびても、汚れはちっとも落ちてないように感じて、またあびた。もう一度、もう一度と。何度も、くりかえしあびた。床にはいっても眠れなくて。とりわけ、おばあさんの寂しさを想像していると、つらくて、気の毒で、とうとう眠れないまま朝になってしまった。服をきかえて、ふたたび仕事にでて。

おばあさんはその後養老院にはいったの。動物虐待のことで裁判にかけられて、あたしも証言しろといわれたのだったけれど、そのとき、おばあさんの子供たちは、自分たちの母親がどういふ暮らしをしていたか承知していた、ということがわかったのね。

市が彼女の住んでいた家の清掃を命じた。借家だったのね。ところが、いくら金をもらって、こんな不潔きわまりない家屋の清掃は請け負えないといって、清掃を請け

負う会社もなかったの。そこで、市はとうとうその家の取り壊しを命じたの。先週、取り壊しがはじまった」

そういう話を聞きながらの昼食をおえて、わたしたちはトラックにもどった。無線ラジオのスイッチをいれると、まもなく警察本部が、うるついていた犬を捕まえてあるという通報が二件あった、とつたえてきた。キャロルは所番地をたずね、ただちにそっちへ向かうと返答した。

そのあたりはひどく貧しくもないし、たいして裕福でもない住宅地で、町の北にあった。捕まえてあった犬の頭はエアデルテリアで、もう一頭はビーグルとコリーの雑種のように見えた。エアデルが庭をうろついているのを発見して捕まえた主婦は、飼い主が名乗りでないようだったら、その犬を自分のところで飼いたいのだが、といった。だから飼い主が名乗りするまで、自分の庭につないでおいてもいいだろうか、とたずねた。かまわないが、それでも手続きは一応必要だからといって、キャロルは報告の書類に記入していた。雑種のほうは、捕まえた人にほしがられるこ

ともなく、トラックにのせられた。目ばかり大きな小型の犬で、開けられたトラックの扉口へ、うながされることもなしに、ひょいと跳びのった。

「それにしても、暇な日だわ」とキャロルはなげいた。かえって疲れる、というのだった。暇でも、トラックを乗りまわしているのがキャロルの任務だから、わたしたちはあちこち走ってみる。気温があがっていて、トラックのなかも暑くなった。わたしたちはちょうどわたしの家のそばを通過していた。その日そこを通過するのは、もう三度目だった。小さな町だから、何度もおなじところを通るのだ。キャロルがまた話していた。

「動物虐待の件で、長期にわたって交渉のあったひとりの女性がいてね。そのひとも猫をたくさん飼っていたのだけれど、餌をじゅうぶんによらないので、猫たちは飢えて病気になるっていた。彼女は強姦される目にあつたあと、家から一歩もでないようになって、猫とだけ暮らしていたの。猫たちのようすがあまりにも酷かったので、ついに収容に踏みきったのだったけれど、猫たちを奪われてまもなく、彼女は死んでしまったの。」

あたしは今でも、その彼女の死は自分がひきおこしたことのように感じているのよ。あたしが猫たちを奪ったから、彼女は死んでしまったのだ、と思えてならないの」

そういって、キャロルはしばらく口をつぐんでいた。それから、またいった。

「こんな小さな町なのに、動物の虐待事件はあとをたたない。十三頭の犬が収容された話、新聞で読まなかった？」

「読まなかった」

「去年の夏のこと。パーク・ストリートの廃屋に、死にかけの犬がたくさんいる、という通報があった。調べてみると、赤い廃屋に、十九頭の犬がいた。飢えて、瀕死の犬ばかり十九頭。すでに死んでいるのもいた。死んでいた犬の首には穴があいていて、無数の蛆虫が出たり入ったりしていたの。虫の息ながら、まだ生きていた犬たちは骨と皮ばかり。床に横たわって、ほそほそと息をしていた。」

犬たちは闘犬だった。ある人物が闘犬賭博につかっていた犬たちだった。闘犬賭博は非法だよ。それにしても、なぜ廃屋にとじこめて飢えさせるようなことをしたのだろうか、と調査官が犯人の友人にたずねると、「もう、犬には

飽きたんとちがうか」と答えたというのね。

……あ、あのね、犬たちの周囲には糞便はいっさい見あたらなかったの。生きのびるために、犬たちは糞まで食べていたのかもしれない。ああ、なんてこと、とあたしは思った」

トラックは赤信号でとまる。

無線がピーピーと鳴って、午前中にしかけた罾に野良猫が一匹かかったから引きとりにこいと、例のトレーラーハウスの女性から連絡がはいった、と知らせた。

そこでわたしたちは目当てのないパトロールを中止して、トレーラーパークをめざした。

家の裏へまわって罾を見ると、灰色の猫がかかっていた。わたしたちが近よると、灰猫は長い毛をぼおぼおと逆立て、歯をむきだし、しゅーっしゅーっと呼をはいいた。ところどころ楕円形に毛が抜けおちている。

「罾で毛がぬけちまったんだね」とトレーラーハウスの住人はいった。「罾で、すりむけちゃったんだ」

「そうじゃないですよ。皮膚病なんですよ」とキャロルはいった。「ほら、こども。こども。この罾で毛がぬけお

ちるなんていうことはないですよ」

「罨で毛がぬけた」

「ちがうの。皮膚病なの」

「そうかねえ。あたし罨のせいだと思いがね」

猫を罨にいられたまま、トラックにのせる。まだ毛を逆立てて、唾をはいている。毛には艶というものの影もない。痩せてくれているから、長い体毛は寸法のあわない、巨大な古コートのように見える。生涯を野良の身分ですごしてきた強気の痩せ猫だ。

「あと一匹、妊娠している黒猫を捕まえば、だいたいおわりですね」とキャロルがいった。

「のこらず捕まえるつもりかね」

「そのほうがいいでしょう。二、三日したら、またきてみましょうか？」

「あたしのほうから連絡するまで、こないでくれ」

「でも、もう間もなく子を産みますよ、あの黒猫は」

「へえ」

「きょうのところは、これでさようなら」

「ああ、さようなら」

トレーラーパークからそのサウスウッドへ行くには、町を斜めにつっきるように道路をえらんで走ればいいが、わたしたちはジグザグに進路をとることにした。かつてひとりの老婆が瀕死の猫四十一匹と同居していた家、清掃を請け負う会社もないので、取り壊しとしまった例の糞便とごみの家のあとを見ることにしたからだ。それはヒーリー・ストリートにあって、わたしの家からもそれほど遠くはないのだ。

適当に手入れのいきとどいた二軒の白い家にはさまれて、壊された家の残骸が山になって盛りあがっていた。それはそのぐしゃぐしゃに潰された腕のなかに、膨大な量の猫の糞をだしているはずだった。糞便地獄だったのだから。病みさらばえた猫四十一匹と孤独な老婆が異様にして凄惨な日をおくっていた家はついに崩れおちた。

わたしたちはその家の残骸のままでトラックをとめることはしなかった。徐行して通過していった。

その日、サウスウッドにはキャロルが追いつづけている犬はいなかった。「こんな暇な日、はじめて」とくりかえしているキャロルは、たちならぶ中流住宅のあいだを縫う

老婆はまた今度も階段の上でトラックを見送る。朝の化粧着のようなのから、縞模様のセーターとストラックスに着替えていた。靴も履きかえていたが、それもやはり爪先がぱくりと口をあけている。爪先は山羊のようでもあるし、靴のふしぎな舌のようにも見える。頭にかぶった毛糸の帽子は、すっかり暑くなっている陽光のなかで、きたるべき災難にそなえる保護帽だ。

トレーラーパークからトラックを出しながら、キャロルはそこからサウスウッドへいくといった。一年がかりで追っている野良犬がいるのだという。シェパードだが、どうしても捕まえることができない。彼女がいくと、かならずちらりと姿を見せるが、捕獲できる距離にちかづく、疾走して去るのだという。

「あたしのトラックのにおいを嗅ぎつけて、逃げるのだと思う」

それは一年がかりの鬼ごっこというわけだった。捕まえることもできないが、犬がサウスウッドという西南の分譲地を去ることもない。犬とキャロルのあいだには確固たる関係ができていく。

ように、ゆっくりと走っていた。

わたしの目に黒い犬が映った。

「あれ、あの黒い犬！ 鎖につながれていないのと違う？」

わたしもすでにいっばしのドッグ・キャッチャー気分。

「どれ？ ああ、あれ……なんだ、飼い主がひっぱってる。残念。」

「あははは。あれ！ あの飼い主、わたしの知り合いじゃないかと思う。あの犬、そう、彼女のレトリバー」

「近くまでいってみる？」

「そうしようか」

わたしは窓から顔をだして呼んだ。

「マギー！ あなたの犬、捕まえそこな、きょうのところは」

マギーはとつぜん背後の車から声をかけられてぎくりとして、ふりむいた。おさない二人の娘をつれていいる。

「どうしたの、そんなトラックに乗って？」

「動物の取り締まりをやっているわけよ。あなたの犬、遠くからみたら賢いでないように見えたから、追ってきたの

よ。おおいに残念。きょうは獲物がひどくすくないから」
「そう、気のどくに。あたしはこれから、この犬にたむしの予防注射してもらいに、獣医のところへいくから」

「じゃ、また」

「じゃ、また。こんなトラックが巡回していること、全然しらなかった」

「おおいに巡回してるのよ」

サウスウッド分譲地を出て、目抜き通りのひとつニール・ストリートへむかう途中の交差点でキャロルはいった。

「二年前に事故にあったのが、この交差点。停止の標識を無視して走ってきた乗用車が、あたしのトラックの横腹にもろに衝突してね。トラックは三十メートルも飛んだ。横転したトラックはこの空き地をころがった。何度も。トラックのなかのあたしも、檻もなんかにぶちあたりながら転がっていた。ころがりながら、ああ、こんなにくりかえし転がっていたら、気分がわるくなってしまふな、と思っただ。トラックがようやく草原で静止したので、あたしは這いだして、乗用車に乗っていた人たちのようすを見にいこうとしていたの。そこへ男の人がやってきて、あんた怪

我してる、血だらけじゃないか、動いちゃいけないよ、そのままじっとしてなさい、ぼくがようすは見てくるから、
といてね。乗用車には若い母親と赤ん坊が乗っていたんですって。そして、ふたりには怪我はまったくなかった。

あたしの兄はいつも短波放送をきいているの。それであたしのトラックが事故にあったことを知って、おおいそぎで現場に駆けつけてきた。あたしはもうそのときには病院へ運ばれていったあとで、大破したトラックを見て、妹は死んでしまった、と考えたのね。病院へ駆けつけてきた両親も、血まみれのあたしを見て、やはりそう思ったらしい。あたしは死にはしなかったけれど、事故のあとしばらくは車を運転するのがおそろしくて、ノイローゼみたいになってしまった。夫がたすけてくれて、ようやく恐怖感を克服して仕事にもどったの」

「動物取り締まり官をやめて、愛護協会の内勤にかえてもらうことは考えなかったのね？」

「考えなかった」

「なぜ？」

「そもそも内勤をやめて、動物取り締まり官になったわけは、内勤の仕事にたえられなかったからだ。内勤で、毎日動物たちを安楽死させなければならぬことがつらかった。たえられなかった。ひどい病気の犬や猫たち。そして七日の猶予期間がすぎても引き取り手のない犬や猫たちは安楽死させるから。注射して……」

「一日平均、何匹ぐらい眠らせたの？」

「二十四」

「そんなに？」

「棄てられて、飢えて、傷ついて、ぼろぼろになって野垂れ死にするより、人間の腕にだかれて、じっと見守られて眠りにつくほうがしあわせだ、という気もしたけれど、でももうこれ以上は続けられない、と思っただ。内勤をやめる方法はないかと考えたのよ。」

いよいよ取り締まり官になってみたら、女だから、いろいろ困難があった。女にできる仕事か、といわれて、真面目に相手にしてくれないとかね。警官と一緒の職場というのも、わけもなく恐ろしくてね。あたしは内気だから、はじめは警官と口もきけなくて、ずいぶん緊張していたの。

ある日のこと、巡回していたら、ダウンタウンにすぐく大きな犬がうろついている、いって捕まえるという連絡がはいったの。さっそく行ってみたら、犬の扮装した人間が駆けまわっているのよ！ 警官たちのしわざだった。あたしをからかってやろうと。それ以来、警官たちはあたしを受け入れてくれるようになって、彼らに守られるかたちで仕事ができるようになった」

「じゃあ、まだしばらくは、この仕事をつづけるわね？」

「そのつもり。人々の敵意も誤解もつらいけれど、あたしにはあっている仕事だもの。トラックにいつも独りきりで乗っているのも、とても寂しいのだけれど、好きでやっている仕事だから我慢する」

交通量が増えていた。四時に勤めがおわる人々が帰りはじめていた。わたしたちはトラックを警察の駐車場にいった。降りたところへ、あちこちに傷や凹みのある白い乗用車をそのトラックのとなりに停めた若い男がよってきた。金色の不精髭がうとうとうしい。着古してかちかちに固くなった皮のジャンパーをきていたが、擦り切れて、ほつれもある。ジーンズはすっかり色があせているだけでなく、ひ

どく汚れていた。

「あのよう」と男はキャロルにいった。「おれの近所のやつらが、おれの犬が吠えて、うるさくてしょうがねえ、とかいうんだけどさ、犬は家のなかで飼ってるんだよ。おれの住んでるあたりは、おっそろしく物騒だからな。番犬おかなかつたら、おれは安心できない。麻薬中毒や、麻薬の密売やってる連中なんかばっかりのところだからね。そういうやつらがおれの庭を横切って行ったたりきたりするから、犬が吠えるんだ」

「そうですか」とキャロルは応答した。「過度に吠える犬のしつけかたについて書いたパンフレットがありますから、それをあげましょう。犬は従順なほうですか？」

「いや、飼い主のおれのことさえ、あんまりきかない。おれが虐待なんかしてるわけじゃないよ。でも、きかないんだ。ときには、おれ自身の命もあぶないんじゃないかと不安になることだってあるよ。うーっと唸って、襲いかかるような恰好するからね」

「そういうとき、あなたはどうしますか？」

「一歩跳びのくね」

んだ。これがその通知の葉書——」

「通知がきたのは、いつでしたか？」

「だいたい三ヵ月ぐらい前だった」

「三ヵ月……どうなっているか、調べてみないとわからないですよ。この番号に電話して、問い合わせせてもらいになりますか？」とキャロルは動物愛護協会の電話番号を書いた紙をわたした。

「すぐに引き取りたいんだが」

「ともかく電話してみてくださいね」

男は口のなかでぶつぶつ音をたてて、通知書だというくしゃくしゃの紙片をふたたびポケットにおさめて、正面の重い扉を全身で押すようにして出ていった。

「あなたは随分おだやかなね。慌てたりすることもないのね」とわたしはいった。

「そうなのよね。夫の友人で、自転車で箱をひいて、アイスクリームの行商をやっていた人がいたの。その友だちを、夫とあたしで手伝ったことがあったのだけれど、倉庫でアイスクリームを箱に詰めていたら、強盗がきたの。売り上げ金があることを知っていて、それを狙ったのね。」

「そんなことしたら、だめです。犬はあなたが恐れていると知って、あなたの主人になってしまふんですからね。従順になるように、犬を訓練することが必要です。訓練所にいれなくてはだめですよ」

「金がかかるからな、そんなことしたら。犬が横柄な態度にできるときには、おれは煉瓦でそいつの頭をがんと殴ってやることもあるよ。そうやって、誰が主人が教えてやるんだ。べつに虐待してるわけじゃない」

「やはり訓練所にいれたほうがいいですよ」

「そうかねえ。ま、考えてみるよ。きょうはべつの用で警察にきたんだ」

若者はそういうと、警察の建物のなかへ入っていった。わたしはちもその後から入っていった。

受けつけてキャロルを待っていたひとりの黒人の男性がちかよってきた。作業衣を着た、六十歳ぐらいに見える男だった。

彼はポケットから、くしゃくしゃになった一枚の紙きれをとりだした。

「わしの犬をあなたが捕まえたそうだが、引き取りたい

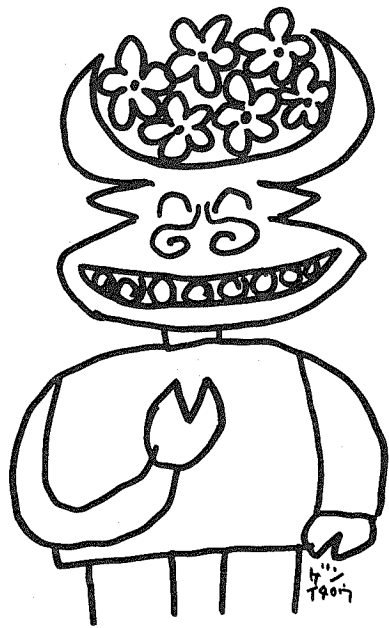
「有り金のこらず出せ！」と強盗は拳銃をつきつけたの、あたしに。ふつうなら、金きり声をあげるとか、泣きわめくとかするものなのに、あたしはそのとき、「ああ、そうですか」といって、自分の財布からお金をとりだして渡したの。「有り金全部とってんだ！」と強盗がいうから、「これで全部ですよ」と答えてね。夫は、「キャロル、議論してる場合じゃない、全部わたすんだよ」なんて慌てているの。「だって、ほんとにこれで全部なのよ」とあたしはいったの。平然としているというか、昂ることがないというか、ともかくそういうたちなのね。どういうのかしら？ 柔道ならったんだけど、投げられても、投げられても、どうという気持ちにならない、攻める気持ちが湧いてこない。先生が、そんなふうじゃだめだ、あんた、柔道やめなさいといったらいいよ。どういうことかしら？ でも、そんなふうだから、この仕事七年も続けてこられたんだと思うの」

警察のガラスをはりめぐらした受けつけの前で、わたしはキャロルとわかれた。子供たちが保育園で迎えをまっていたのだったから。

水牛通信 100号記念コンサート

笑う水牛

高橋悠治・作曲構成「カワカ」(仮題)による



1987年12月中旬 築地本願寺蓮華殿

翌日、わたしは葉書でキャロルに、彼女のトラックに乗せてもらったことの礼をいった。それから二日たつと、彼女から電話があつて、あたしこそ、ありがとをいいたいたい。だって、あたしのこと、書いてくれるんですもの」といった。そして、わたしは彼女のことを、こんなふうに書いてみた。

いまでも、車を運転していると、キャロルの有蓋トラックとすれちがうことがある。交差点で停車しているのを見かけることもある。運転台の彼女は、まだすこしぶかぶかのカーキ色の制服だ。この町にただ一着しかない「動物取り締め官」の制服だ。二十六歳、女性のアニマル・コントロール・オフィサー、キャロル・スミスの制服。

